

保育者を目指す学生の文章作成力について

赤間 公子

I はじめに

よい文章とは、伝えたいことが的確に伝わる文章である。言い換えると読み手にわかりやすい文章ということになる。わかりやすい文章を書くにあたっては、基本的な文法や表記を正しく理解していなければならない。加えて不要な表現がないことや、主語述語が正しく呼応していること、要点がはっきりしていることなどが必要であろう。

保育者は、園児の成長記録にもなる指導計画書の作成や、保護者が何より楽しみにしている連絡帳、お便り、お知らせといった文章を書くことが多い職種である。わかりやすい文章を書く能力が必要であるということは言うまでもない。

筆者の勤務校は保育者養成のための短期大学である。カリキュラムの特徴として2年間の約4割を実習に充てていること、また、即戦力を育成するためにより実践的な指導を取り入れた授業が多いことが挙げられる。

実習先から返却される日誌や、レポートなどの提出物などを見ると、漢字を始めとする基礎的な国語力、特に具体的に人に伝わる文章作成力の難しさを持つ学生もいる。

2年という短い期間でこうした学生の基礎的な国語力を向上させることは難しいことであり、一朝一夕には達成できるものではない。しかし冒頭で述べたように、より質の高い保育者養成を目指し、読み手にわかりやすい文章を書く力を付けることは教員の課題の一つとなっている。

II 研究の目的

- ① 筆者は平成26年第68回日本保育学会において「保育者を目指す学生の文章作成力について」と題し、学生が「保育の表現技術（国語）」においてどのような授業を望んでいるかについて報告した。それによると文章作成への苦手意識は高いが人に伝わる文章を書きたいと考えている学生がほとんどであった。また他力本願的ではあるが、授業に期待しており、約60%の学生が「文章作成に特化した授業、きめ細かい添削、個別的な対応」を希望していた。学生のニーズに応じて添削を行う中で、明らかとなった文章上の特徴を翌平成27年第69回日本保育学会において以下のことを発表した。

＜学生の文章に見られる特徴＞

- ① 誤字当て字がある
- ② 話し言葉がそのまま使われる
- ③ 主語と述語のねじれがあり、言いたいことの焦点がぼやける
- ④ 文法上の間違いがある（助詞、副詞、修飾語と被修飾語の対応など）
- ⑤ 一文が長い
- ⑥ 文体が不統一
- ⑦ 同じ表現を何度も繰り返し使用する

現在もこの授業における添削は続けて行っている。今年度の終わりにこれからの授業の在り方や学生のニーズを把握し検討するために、文章に特化した授業の実践についてのアンケート調査を行った。その結果から改めて「保育者養成の質の向上」を目指す「授業の在り方」について考えたい。

III 研究の対象と方法

対象：T短期大学1年生48名

授業の内容：授業名「保育の表現技術国語」文章作成に特化した授業内容。

文章作成の題材は筆者が新聞のコラムなどから選ぶ。 ➡ 学生はそれを読み

感想や考えなどを400字程度でまとめ授業時間内で提出 ➡ 筆者は次の授業時に添削したものを返却 ➡、学生はそれを基に書き直しをする という繰り返しを1年間行った。

その他、文法上の間違いに気づかせるプリント学習を併用した。

12月には授業および日常生活における文章作成に関わる習慣についてアンケート調査を実施した。

文章作成のテーマ

1：小学女子生徒の行方不明事件から～目の力～
2：リンカーン～悪感情を一掃する方法
3：ワシントン～その場にはいない人を非難するな
4：原発事故といじめ
5：東日本大震災から
6：無人島に持っていきたいものは～ひふみんは・・・
7：鳥井信治郎「何でもやってみなければ わからない」
8：豊田 英二「問題を解決するのは 最後は 自分である」
9：あなたにとって今忘れていた大切なものは？
10：徳富 蘇峰「多忙とは、怠け者の遁辞である」

12月実施のアンケート内容

- 1、授業について問う3項目
- 2、添削について問う3項目
- 3、文章向上力について問う1項目
- 4、これから行いたいと考える自分の取り組みを問う3項目
- 5、生活習慣を問う5項目
- 6、今後の授業への希望を自由記述で記入

IV 結果と考察

アンケートの結果から

1 授業について

①文章を書くことに対して、苦手意識を持つ学生は多いが、授業で文章を書く内にその苦手意識がなくなったと回答した学生は42%、また文章が上達したと回答した学生は55%と半数を超えた。誤字脱字当て字が減少したと回答した学生は93%であった。書けない漢字やわからない意味などを調べながら文章を書くことを習慣化させるために、辞書、スマートフォンの使用を授業中許可した結果であると考えられる。

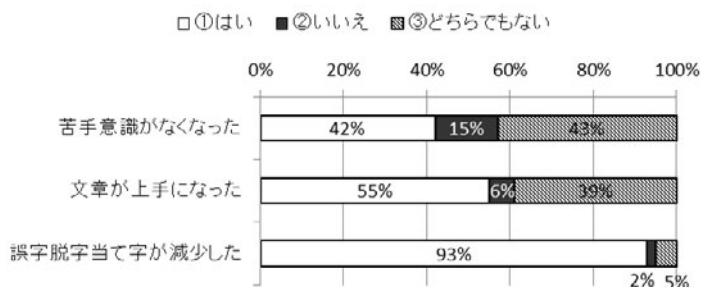


図1. 「作文を書く授業について」の回答

②作文の添削について、95%がよい経験であると回答しておりほとんどの学生が前向きに捉えていることがわかる。また、添削によって文章が上手になったと回答した者は72%で、この先も添削を受けたいとする回答は87%であった。この結果から添削の授業の継続は、学生のニーズであると言える。

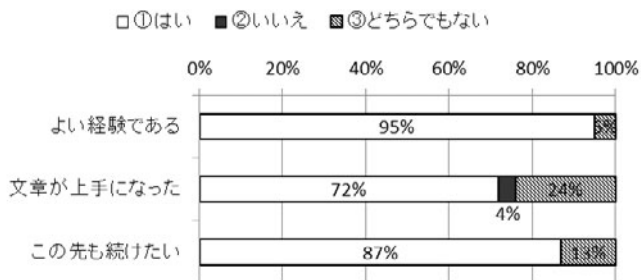


図2.「作文の添削について」の回答

③文章向上のために必要な力はどのようなものかと考えているか複数回答の結果、語彙力、文法力、漢字力が上位で、それに続いて経験力や説得力、さらに人に読んでもらうこと、人から褒められること、人前で発表することとなっている。学生達は概ね授業で取り上げたことを、文章力向上に必要な事柄として受け取っていることがわかる。また授業ではできなかった人前での発表なども必要と考えていることがわかった。これは、今後、授業でとりあげていきたい。

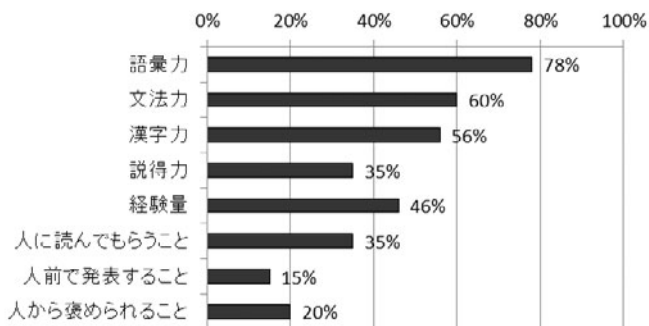


図3.「文章向上力について」の回答

これから取り組みたいと思うことの回答では、読書量を増やすが61%と最も多かった。約6割の学生は読書量が不足していると考えているということである。また、文章検定など新たに何か受験するといったことには非積極的であった。

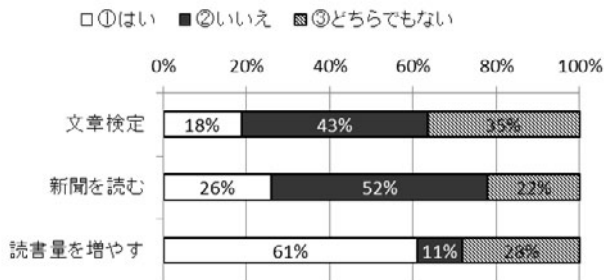


図4.「これから行う予定の自分の取り組み」の回答

④生活習慣について彼らの一日の読書量や、新聞を読むか否か、どのような種類の読書が多いかと言ったことを回答してもらった。一日の読書量は0時間と回答した学生が約6割おり、これは④の今後の取り組み希望と合致する結果であった。

学生の一日の平均読書時間は、約25分であった。

文部科学省は「国語力を身につけるための国語教育の在り方」の国語力の向上を目指す理由の中で、近年の日本社会に見られる人心などの荒廃が人間として持つべき感性・情緒を理解する力、すなわち情緒力の欠如に起因する部分が大きいと考えられることを問題視している。そしてこの力が自然に身につくものではなく、主に国語教育を通して体得されるものであるとしている。国語教育の大きな目標はこのような情緒力を確実に育成し、それによって確かな教養や大局観を養うことにあるという。そして「自ら本に手を伸ばす子どもを育てる」国語教育の必要性が示されている。しかしながら、こうした指摘と相反するように2014年2月に公表された「第49回学生生活実

態調査」の概要報告によると全国の国公立私立学部学生 8930 人の一日の読書時間は 26.9 分であったとしている。また、読書時間 0 の学生は 4 割を超えたという。この結果は、今回の調査とほぼ合致する。

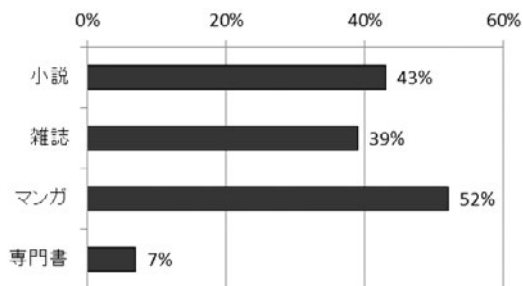


図5. 生活習慣「どのような種類の本を読んでいるか」の回答

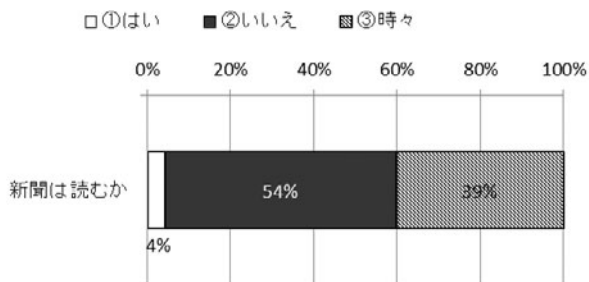


図6. 生活習慣「新聞は読むか」の回答

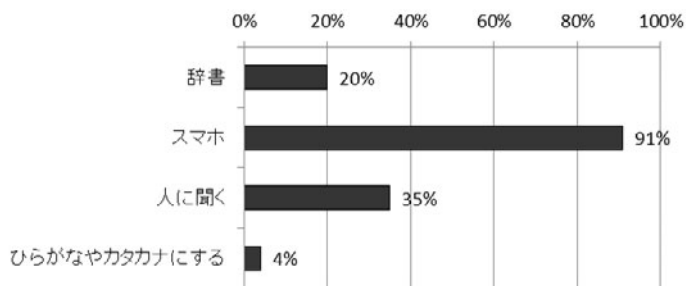


図7. 生活習慣「漢字を調べる方法」の回答

⑥今後の授業についての意見（自由記述）として、多かったことを抜粋すると

- ・書く内容の濃さが変わった。
- ・誤字脱字などが少なくなり、文章力がついた。
- ・漢字を書くのが億劫ではなくなった
- ・具体例や説得力のある文章が書けるようになった。
- ・余計な語句を削除する大切さがわかった。
- ・文章を書く段階で、過去のことや自分の考えを整理して物事を考えるようになった。
- ・4月の時と比べて伝えたいことが短くまとめられるようになった。
- ・言葉の言い換えに慣れた。
- ・添削後返された文章には発見があり、どこを改善すればよいか知ることができるようになった。
- ・文章の構成が変わった。
- ・書くペースが速くなった
- ・文の統一感が出た
- ・最初は何を書けばよいか、出だしがわからなくて時間がかかったが、何回か書くうちにすらすら書けるようになった。
- ・言葉の使い方に気をつけるようになった
- ・苦手意識が薄らいだ

というものだった。また、今後の授業への提言として友達同士での添削や、読む文章を自分の好きなものにするるとよい文章が書けそうな気がするといった意見や、文章を書いた後、皆の前で発表することに繋げるとよいという意見もあった。

概して、学生の自由記述は、筆者が意図した授業のねらいの達成を裏付けるものであった。

文章を書く力を向上させるためには、特に自分の文章の間違いや癖に気づくことは重要である。添削を受ける意味はここにある。また読み手を意識した文章を書こうとすることは、表現を精選することに繋がる。こうしたトレーニング

グが学生自身の中で日常的に行われるようになると、わかりやすい文章を書くということが「身についた力」になっていくのではないかと考える。

今後さらに、文章作成に特化した個々に丁寧な指導を続けていきたいと考える。また、人前で自分の書いた文章を発表し、それに対する意見を聞くという取り組みも加えていきたい。言いたいことが正しく伝わったか否か、その場で自分にわかるよい経験になるであろう。

学生の自由記述の中に「文章が上達し、これでよいと言われれば言われるほど、不安が増す」といった意見があった。これに対し、添削した部分を可視化することで、学生の不安を解消することに繋がるのではないかと考える。その具体的な方法については今後の研究課題として取り組んでいきたい。また、なかなか客観的な評価がしにくい「添削」という指導をできるだけ、学生が納得のいく指導にするために「添削」の評価尺度を作成し、より客観的な評価に取り組みたいと考える。

参考文献

- 佐藤達全（2014）保育科学生の文章表現力低下の原因と対応—日本語表現法の課題文と実習日誌を中心として—育英短期大学研究紀要第 31 号 p 57～71
- 由井恭子・近藤裕子・春日美穂・日下田岳史（2015）大学生における日本語文章表現技術の授業展開とその成果 大正大学研究紀要 100 号 p 360～374
- 酒井希里子（1998）日本人学生の、文章力における問題点(1)：一文単位でのわかりやすさについて考える 文化女子大学紀要, 人文・社会学研究 6 p 201～210 文部科学省「これからの時代に求められる国語力について」<http://www.mext.go.jp/b-menu/shingi/bunka/toushin/04030201/003.htm>
- 文化庁平成 25 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要
- 川端元子（2009）論理的文章における接続表現の機能—学生による作文の分析を通して—愛知工業大学研究報告第 44 号 p17～26